

〈Blanks〉 試 論

— W・イザー『行為としての読書』を読む —

山 元 隆 春

読 む

状況や慣習は、空白を補填する処理方法の調整の機能は果すが、空白そのものは逆に、偶発性と他者の経験の経験不可能性から生じており、結果的にコミュニケーションの原動力として働いている。同様に、テキストと読者との基本的な非対称は、読書過程でのコミュニケーション作用を起す空白ととらえられる。すなわち、共通な状況の欠如と共通な準拠の欠如は、空白（不確定性）であって、それらは人間同士の相互作用の発生源である偶発性と〈no thing〉とに対応する。非対称偶発性、〈no thing〉といった不確定性は、あらゆる相互作用の発生源を構成している空白 (Leer) の形式上の相違にすぎない。すでに指摘したように、この空白は、所定の存在論的事実といったものではなく、対人的相互作用ないしは、テキストと読者の非対称関係に内在した不均衡から作り出され、そして確定される。均衡は空白の補填によってしかえられないので、相互作用過程で構成される空白は、たえず読者の側からの投影をうけることになる。相互作用の成否から見れば、対人関係におけるパートナー相互の投影がなんらの変化もなかったり、読者の投影が全く抵抗なしにテキストに重ね合わされる場合には、不成功である。つまり、空白が読者自身の投影で完全に補填されるのは、相互作用の不成立を意味する。空白があればこそ読者に投影の態度を起させるのであるし、テキスト自体に変化が生ずるわけではないので、テキストと読者との関係が成立するのは、読者の側の投影に変化が起きる場合をおいてない。(W・イザー／榎田収訳『行為としての読書』岩波書店・一九八二年・二八六～二八七頁)

一、比喩としての理論の可能性

上谷順三郎が細やかに検討しているように⁽¹⁾、邦訳出版後十年を経たW・イザーの『行為としての読書』が文学教育に与えた影響は決して小さくない。その一方で、中村敦雄は、イザーと「読者反応批評」の雄スタンレー・フィッシュとの〈論争〉の検討を踏まえた上で、イザーの理論が文学教育の基礎理論たり得ないという結論を導いている。この徹底した真摯な批判的考察の中で、中村の譲歩している点の一つだけある。それは、

イーザーの理論を「一種の比喩」として捉えていくのならば、文学教育の基礎理論として生かしていく可能性が残されていると論じている件りである。この譲歩の中にこそ、イーザーの理論に文学教育基礎論としての価値を見出す契機が存在するのではないかと、というのが本稿における基本的な考え方である。

二、暗黙裡の結合可能性

——〈blanks〉の機能——

冒頭に取り上げた引用部分で、イーザーが「読むという行為」の推進力とする〈空白〉とはどのようなものなのであろう。はっきりしているのは、それが「所定の存在論的事実」ではない、ということである。イーザーは「Blanks (空所、空白)」という概念を、ロレン・インガルデンの「不確定箇所 Unbestimmtheitsstellen; spots of indeterminacy, place of indeterminacy」という概念と対比させながら次のように説明している。

「不確定箇所」が、志向対象ないしは「図式化された見解」に内在する確定性の欠如を指すのに対して、空所は、テクストという包括的なシステム内部の空白を指し、その補填はテクストがもつさまざまなパターン相互の結合によって行われる。つまり、インガルデンでは補完の必要があったのに対して、ここでは結合の必要性が生じる」(『行為としての読書』三二二頁)

このように「blanks (空所)」は、読者による「結合」の可能性を指し示す部分なのである。それゆえ、想像の余地というような捉え方だけではイーザーの言う「blanks (空所)」の機能を十全に捉えたことにならない。むしろテクストの表現に対する私たちの解釈

を暗黙裡に活性化するというところこそ「blanks (空所)」の最大の機能であると言ってよい。

三、「無」の生産性——レインの

「no-thing」とイーザーの「blanks」——

ところで、冒頭の引用部分の中にあつた「人間同士の相互作用の発生源」としての「no-thing」という語は、R・D・レインの次の発言を踏まえたものである。

「That which is really 'between' cannot be named by any things that come between. The between is itself no-thing」^⑧
この部分についての、邦訳『行為としての読書』の轡田取の訳と邦訳『経験の政治学』の笠原嘉・塚本嘉壽の訳とを次に掲げる。

「本当に「中間 between」であるものは、間に入るとようなものによつても名を名づけることはできない。中間そのものは空白 (no-thing) である」(『行為としての読書』二八四頁)「ほんとうに「間」にあるそれは、間に入ってくるどのようなものによつても名づけることができないのです。間はそれ自体、非—事物、つまり無なのです」^⑨

轡田は「行為としての読書」の文脈を重視して「no-thing」を「空白」と訳しているのであるが、笠原らは同じ語を「非—事物、つまり無」と訳している。この違いは、単なる訳語の違いということを超えて、イーザーの「blanks」論を理解する上で重要な示唆を与えている。つまり「blanks」論を組み立てる上で、イーザーはレインの「no-thing」概念の持つ重い含意をも踏まえていたのではなかつたらうか。レインはさらに次のように言う。

〈言語〉において、かつ言語をとおして表現された、言語形成以前の沈黙は、言語によっては表現されません。けれども言語が言語自らが言い表わすことのできない事がらを伝達するために、言語の間隔、空白、言い間違い、縦横に組みあわされた構造、構文、音、意味などを用いる、ということとは可能です。(中略||山元)つまり、あらゆる存在者の存在根拠は、それら存在者の間の関係なのです。⑥

こういったレインの言語観は、言語と言語との間に横たわる〈無〉の生産性を強調したものである。そこには〈無〉からすべてが生じるといふ発想さえ読み取ることができる。そもそも〈Blanks〉論の構築にあたって、イザーがレインの言葉を参照した意図もそここのころにあったのではなからうか。

このように、イザーの〈Blanks〉概念設定の根底にはテクストの言説を生かしている〈無〉ないし〈間〉の潜在的な力へのまなざしがあった。〈空白〉や〈行間〉を記号の欠如とみなすのではなく、そのような〈無〉が人々の受容行為を活性化するという逆説的な論理こそイザーの思考の本領なのである。

四、〈無〉が読者の意識を左右する

——「鈴」における〈Blanks〉——

〈blanks (空所)〉なくし〈negation (否定)〉といったテクストの〈不確定性〉を、イザーは読者による〈発見〉の契機とみなしている。この〈不確定性〉のうち、〈否定〉の方は、どちらかといえば常識的なものと思われてならない。ロシア・フォルマリストの言ひ〈異化〉ないし〈非日常化〉を知るものにとってこの概念はさ

して新鮮ではない。これはイザーの独創とは言い難いのである。同様に、〈Blanks〉論もけっしてイザーの独創であるとは言えないのであるが、彼の読書行為論において精彩を放っているのは、様々な批判や誤解がありながらもその〈Blanks〉論であることに違いない。

〈Blanks〉の機能についてイザーは次のように説明する。

〈テクストのさまざまなセグメントは結合の可能性をもっているが、それはテクストそのものには明示されていない。その結合の可能性を合図するのが空所である。従って、空所は〈テクストの関節〉ともいふべきもので、叙述の遠近法それぞれの接合部を示す働きをするとともに、読者に対しては、想像力によって、どのようにセグメント相互を接合しようかという条件を示している。従って、読者がこの結合をなし遂げれば、空所は〈消滅〉する。⑦

(『行為としての読書』三一三頁)

ここには〈blanks (空所)〉の機能についての明確な説明が示されている。が、最後の一文で〈空所〉を〈消滅〉しうるものとしているところは容易に首肯しえない。イザーが言うように〈blanks (空所)〉を〈セグメント相互を接合しようかという条件を示〉すものとするなら、それは読者による解釈行為が成立した後に依然残されるものではないのだろうか。解釈を遂行した後にも依然生き残るだけの強さを持たなければ、イザーの言うような効果を〈blanks〉が挙げることではできない筈である。このところでは、レインの〈no-thing〉論にあった含蓄が損なわれているように思われてならない。

たとえば、中学校の文学教材となっているかつおきんやの「鈴」

(学校図書『中学校国語一』所収)において、〈blanks(空所)〉がどのように働いているかということを考えてみよう。「鈴」という小説は、次の三つの種類の叙述から成り立っている。

1、少年〈庄一〉の日記

2、〈庄一〉の日記に対する母親の補筆

3、1・2を発見した〈わたし〉の語り

「鈴」の作者は、この1から3のそれぞれ叙述を、〈断片〉化して配列し、意識的に各々の〈断片〉の間に〈Blanks〉を作り出しているのである。現実の読者は、この三種の叙述の位相のそれぞれに対して異なった姿勢をとらざるをえない。そのため、〈庄一〉の日記の記述、それに対する母親の〈補筆〉、またその各々についての〈わたし〉の注記、などの〈間〉にはいくばくかの距離が生じる。読者たちは暗黙の内にこの三種の記述間の距離を前提として、この小説を読み進める。そのことによって、各々の記述に込められた人物たちの行動と心理が照らし出される。

日記の記述及び〈補筆〉あるいは〈わたし〉の語りというそれぞれの記述の間が絶たれているからこそ、私たちはこの小説の持つ含蓄を味わうことができるのである。〈Blanks〉とは、たとえば「鈴」における各々の叙述の〈間〉に横たわるような〈無〉の部分であり、それはけっして容易に埋めることのできる穴のようなものではない筈である。そのものの構造の中に〈無〉の部分が含まれているからこそ、豊かな解釈が生み出される可能性が生じる。少なくとも、「鈴」の〈blanks〉は「鈴」というテキストを読者が解釈し終えた後にも残される。むしろ容易に消え去るものではないものとして〈blanks〉を捉えることが、イーザーの主張を生かすことにつながる

るのである。

五、発見のための旋回軸

——〈blanks〉論の限界と可能性——

ただ、冒頭に引用した部分の後半は、図らずもイーザーの〈blanks〉論の限界を示している。すなわち、〈空白〉を〈読者自身の投影で完全に補填〉することが〈相互作用の不成立〉を招くというのである。これは自らの〈blanks〉概念とインガルデンの〈不確定箇所〉概念との混同を避け、安易に読者の自由を認めたものとして誤解されぬよう、注意深く先手を打った部分であるが、裏を返せば、イーザー自身が読者の自由を全面的に認めたわけではないことを意味する。〈テキスト自体に変化が生ずるわけではないので、テキストと読者との関係が成立するのは、読者の側の投影に変化が起きる場合においてない。〉という件りは、テキストの地位を絶対化したものと考えることができる。

〈読むという行為〉はむしろ作者によって仕掛けられたテキストと読者との間の闘争と言ってもよい筈であるし、現実の読者はテキストの内容をすんなりと受けとめるといにはあまりに現実の影響を受け過ぎていいる。イーザーの理論が〈読むという習慣を持たない白紙の状態の読者を前提としている。〉というダグマー・バーノウのいち早い指摘は全くその通りという他ない。

だが私には、こうした欠陥とも思われる部分こそが、文学教育の基礎理論としての『行為としての読書』の価値となっているように思われてならない。教材がいかなる〈断片〉から成り立っているかということを知り、それらの〈断片〉の結合可能性を探っていく

ということ、教材研究の上で、あるいは学習者に求める〈読み〉の姿を考えていく上で基本的な営みであると言ってよい。

イーザーも言うように〈blanks〉とは「一種の旋回軸 a kind of pivot」のようなものであり、私たちがテクストの断片の多様なつながりを発見していくための足場となる。逆説めくが、〈blanks〉という比喩を用いて読みの足場の発見を説いたイーザーの論は、テクストにこだわりをもつからこそ、かえって文学教育の基礎理論として重要なのである。イーザーの提起した諸概念は依然曖昧なままである。しかし、理論そのものが曖昧さを備えた比喩だからこそ、その解釈において読者に新たな発見がもたらされるのである。

注(1) 上谷順三郎「国語教育における読者論導入をめぐる議論の総括とその展望」『国語指導研究』第三集、一九九〇年、三九～五〇頁。

(2) 中村敦雄「文学教育の基礎理論研究」『読書科学』第三四巻四号、一九九〇年、一五五～一六四頁。

(3) Laing, R. D., *The Politics of Experience, and The Bird of Paradise*, Penguin, 1967, p. 34.

(4) R・D・レイン（笠原嘉／塚本嘉壽訳）『経験の政治学』みすず書房、一九七三年、三七頁。

(5) 同右書、三九～四〇頁。

(6) Barnouw, Dagnar, "Review of The Act of Reading and The Implied Reader by Wolfgang Iser." *Modern Language Notes*, 94, Dec. 1979, p. 1207.

(7) Iser, Wolfgang, *The Act of Reading*. The Johns Hopkins U. P., 1978, p. 169.

(やまもと・たかはる／鳴門教育大学)